⑲ふしぎな井戸(薬水)

薬水に、ふしぎな井戸がある。

弘法大師が、宇陀の室生寺と高野山のあいだをゆききしていたころ、あるときこの村を通りかかると、村の人たちが大ぜい疫病にかかってこまっているのをみてあわれに思い、このふしぎな井戸を、教えてくれたという。村の病人たちがその水をのむと、病気がたちまちなおってしまった。うわさはすぐに、四方にひろまり、たくさんな病人がその水をのんでたすけてもらった。それでそのかたわらに、大師堂も建立されたほどであった。

ところがそののち、無信の人が、この水で米をといたり、むつきを洗ったりなどしたので、そのたたりをうけて失明してしまったようなことがあった。それからというものは、人々はこの水をこわがって、ちかよらなくなってしまった。

大師堂は、明治のはじめにこわされてしまってのこっていないが、そのふしぎな井戸といわれるものは、民家の敷地内に現存している。

薬水という地名は、こういう伝説からつけられていることは、いうまでもない。